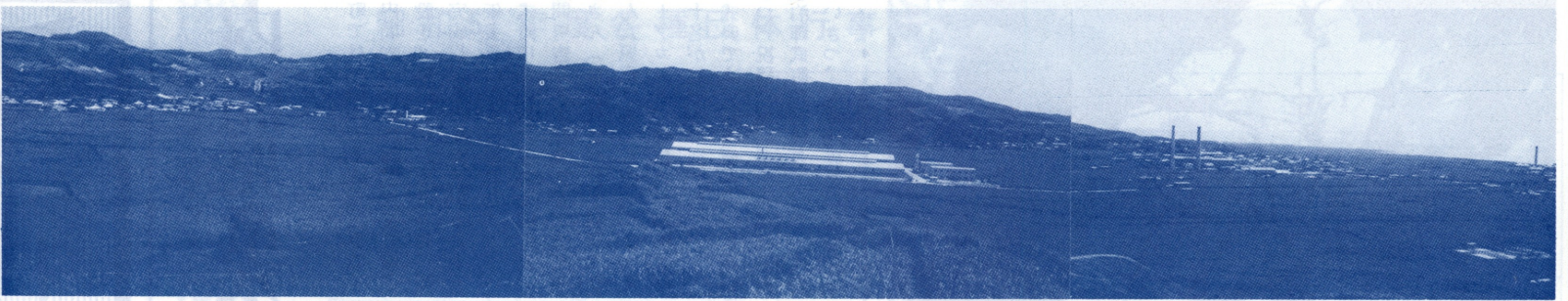
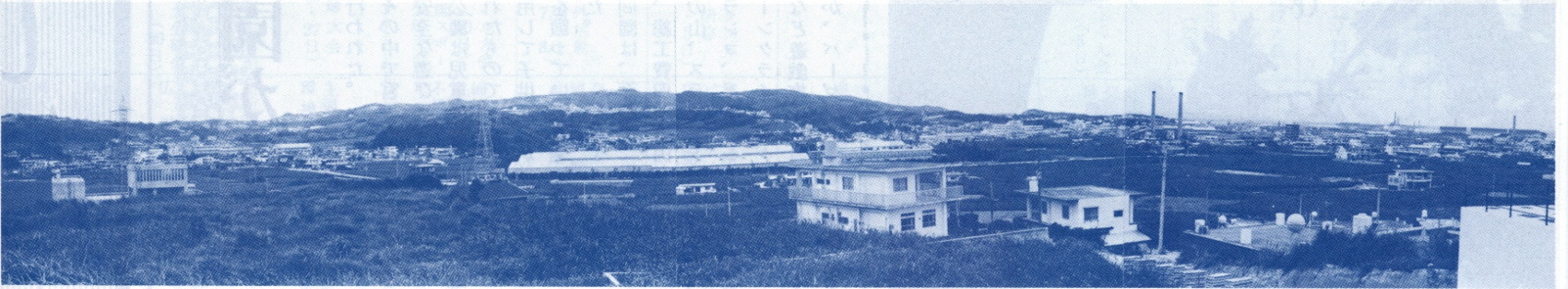


▶十四年前の本町の全景、見渡す限りさとうさび畑



▶現在の本町全景、開発が進み、さとうさび畑が姿を消していった。



はじめに

私達の西原町は、復帰を前後して企業立地、琉球大学新キャンパス建設及び移転、新興住宅団地開発等が行われた。

西原平野部の開発状況は目を見張るものがあり、大きく変貌を遂げた。また、県道三八号線沿の翁長・棚原・幸地一帯をはじめ上原地域の変化も著しく本町は、全般的に都市化傾向が進んだと云える。

人口も、昭和四十三年から四十七年にかけて約一万人で推移していたが昭和四十八年から社会増加を伴って年々伸びはじめ昭和五十年、五十一年にはそれぞれ年間、一、二六七人、一、二〇八人と急激に増加し人口急増市町村に仲間入りした。昭和五十二年以降は、年間三五三人(五二年)、五六三人(五三年)、五三八人(五四年)六四五人(五五年)、四八一人(五六年)増加し続け昭和五十七年四月末日で一七七、二七三人を数えた。

ちなみに昭和四十七年の人口と比較して現在は約一・六倍になった。このように本町は、転入者が多く、新しく本町に住いを構えられた方と親子代々から住んでいた住民との間には、色々な面でギャップを生じやすい。今まで住んでいた環境が違うわけだから性格、考え方等の違いは当然と云えば当然のことである。しかし、今必要なものは、町民融和であり、そのためにはどうしても相互理解が不可欠である。町企画課では「おらが

まち」(シリーズ)で本町の地域めぐりを行い各地域(字又は新しい団地自治会)の特色等を全般的に紹介していきたいと思います。全町民が各地域を理解することにより横のつながりを深くし西原町の概観を知っていただければ幸いです。

地名の語原は北原

南東沿岸部は、南島風土記によれば、北原の意で「北」のことを方言で「ニシ」と呼び、首里(御城)から北にある地方ということから西原と称するようになった。

古くは、南風原・具志間切と共に首里王庁の直轄間切であった。行政も明治四十一年に西原間切から西原村に改称し、昭和五十四年四月一日に町制に移した。

位置

本町は、県都那覇市の北東約十キロメートル、北緯二六度一二分二四秒から二六度一五分一二秒、東経一二七度四四分六秒から一二七度四七分三〇秒に位置し、総面積一五・四平方キロメートルで東西約五・八キロメートル、南北に約五・一キロメートルのやや楕円形状をなしている。

また、沖縄本島東部海岸における中部と南部の接点にあり、東部は中城湾に面し、西部は那覇市、北西部は浦添市、北部は宜野湾市、北東部は中城村、南部は与那原町、南西部は南風原町と六ヶ市町村に隣接し、教育・文化・経済・交通

に地の利を得ている。

本町には、西原富士と呼ばれる運玉森があり、北西台地部は、幸地城、棚原城が残り、海抜約一〇〇メートルの丘陵地帯で七ヶ字からなり、本島西部にやや傾斜し、三つの主要河川は合流し牧港川から東支那海に注いでいる。

南昭沿岸部は、運玉森の麓から東にかけて海抜約五メートルの肥沃で広大な平野に十四ヶ字があり六つの主要河川が中城湾に流れている。

行政区は十六字は二十一

部落行政の変遷をみると、十七世紀はじめごろの琉球石高宛帳によれば我謝・与那城・安室・古津・呉屋・津花波・内間・こはまきや、津堅島、廣地・おなか、たいら、あめく・めかる、泊町のほか不明村を含め十二ヶ村であった。

南島風土記によれば西原間切はもと我謝・与那城・内間、小橋川津花波、呉屋、小波津、幸地、翁長、安室、平良、天久、津堅、安謝、桃原、城、掛保久、嘉手苅・銘苅、太田、真境名、東風平の十二村を含んでいた。元文二年(一七三七年)、天久、太田、銘苅、安謝の四村を真和志間切に出し、津堅を勝連間切に出し、棚原を浦添間切より、末吉を真和志間切より入れ、小那覇(検地帳おにやは石嶺(検地帳きには作る)を置き真境名、東風平を廃した。大正九年に石嶺、平良、末吉は首里市に編入されたと云われている。

昭和六年に棚原より森川、我謝より兼久、安室、桃原より池田をそれぞれ分立させた。昭和七年には森川より徳佐田、千原、上原がそれぞれ誕生した。

昭和五十二年に行政区改編により十六区制に改められた。現在の字は、幸地、棚原、徳佐田、森川、千原、上原、翁長、呉

屋、津花波、小橋川、内間、掛保久、嘉手苅、小那覇、兼久、与那城、我謝、安室、桃原、池田、小波津。これとは別に、RBC坂田ハイツ(翁長・幸地在)、小波津団地(小波津在)は、大字に匹敵する人口規模の自治区を結成している。また、戦前まで集落を形成していた掛保久の屋敷部・崎原、小那覇の屋敷部・仲伊保、伊保之浜のような戦後、米軍による軍用地接収により移転を余儀なくされた特殊な部落もあり、それらの部落出身者のはとんどが、我謝(通称Ⅱ試験場地)、与那城(通称Ⅱ新部落)、兼久を中心に住所を移している。

土地利用

本町は、全域的に農地、自然緑地、集落、公共施設、企業等が混在し、地域的には、町の中央部から南東に広がるやや扇形状の低地に農地と集落が混在し、この地域に総人口の約六六%が集中して生活活動地域を形成している。

臨海部の西原平野には、海岸とほぼ平行に国道三二九号線が南北に走り、その沿線に都市計画法に基づき住居地域、第一種住居専用地域が設定され、本町で最も開発が進んでいる地域である。

産業

臨海部北側は、昭和四十四年十月からエッソスタンダード株式会社(現在Ⅱ南石油株式会社)が、六八万七、九六六平方メートルの公有水面を埋立てて石油製精工場を設立したが、その公有水面とそれに隣接する一部を含めて七四万平方メートルが工業専用地域に指定された。その周辺には、各種の企業が集中し、産業活動地域を形成している。また、臨海部の広大な平地は南北に農用地が広がっている。

北西台地部では県道三八号線の東西に傾斜緑地が残り、県道二九号線沿に農用地・集落・文教施設等が散在し、文教住宅地域を形成している。

本町の土壌は、ほとんどがジャイガルで〇沃であるため王朝時代には米穀等の生産地として知られた。明治四十年に政府が「台南製糖株式会社」を設立するとさとうきび生産が盛んになり、昭和四十年代までさとうきびを主とする純農村として、発展を遂げてきたが昭和四十七年の復帰を境に地域開発が盛んになり、農地は減少した。昭和五十五年国勢調査によれば産業別就業者は、第一次産業が六六四人(一〇・九%)、第二次産業が一、七〇九人(二八・%)、第三次産業が三、七二四人(六一・%)、計六、〇九五五人。就業構造も復帰前に比べて大きく変容し農村型から都市型に変化した。

おらがまち

西原町



▲企業が立地している臨海部北側

企業進出は

めまぐるしい

復帰前に西原温泉（昭和三十三年創業、以下創業年）、中部製糖KK（三十五年）、新沖縄観光開発KK（三十五年）、新沖縄観光開発KK（三十五年）、金秀鉄工KK（四十三年）、東洋コンクリート（四十四年）、南西石油KK（四十七年）、四十四年公有水面埋立開始）、オキコ製パンKK（四十七年）など大型企業が本町に進出し、復帰後も中小各種の企業の進出は促進され今日の活況を呈する街になった。

昭和五十六年三月末に町商工会の会員数は三百二十五を数え今後益々増える傾向になる。

その内訳は、建設業（事業所数二五十四、以下同じ）、製造業（三十）、御売業（十六）、小売業（百四十五）、金融・保険業（三）運輸通信業（四）、サービス業（

姓

本町の各姓の代表的な姓は、与那嶺、翁長、外間、比嘉、宮里、城間、安座間、佐久田、棚原、許田、普天間、石原、屋良、喜納、仲宗根、呉屋、大城、宮城、与儀玉城、嘉手苅、中山、崎原、新田安里、米須、花城、玉那覇、新川新垣、宮平、小橋川、平良、与那城、喜屋武、安谷屋、島袋、比屋根、小波津、糸数などである。

名所・旧跡

本町の名所・旧跡には、西原富士といわれ西原のシンボルでありなだらかで美しい山の稜線をたたえる運玉森、尚円王由緒の内間御



▲なだらかで美しい山の稜線をたたえる運玉森は西原のシンボルである。

新興住宅

団地の開発

復帰後、都市のドーナツ化現象に伴って那覇市に地理的に近いこともあってベッドタウンとして新興住宅団地の開発が進んだ。主に原野を切り開き大規模の宅地造成が五ヶ所で行われた。

RBC坂田ハイツ（昭和四十九年）五十四年住宅建設、以下同じ、

運玉森は西原のシンボル

勤住協賛長団地（四十九年～五十四年）、小波津団地（四十九年～五十四年）、津花波、小橋川にまたがる西原台団地（五十二年～五十四年）、与那城・我謝にまたがる西原ハイツ（五十六年宅地造成着工、現在まだ住宅建設行われていない）など五ヶ所である。

ちなみにRBC坂田ハイツでは昭和四十九年から五十三年にかけて、百八十二世帯（現在の世帯数の七二・四％）が入居した。五十二年が最も多く六十七世帯（二六・一％）が入居。小波津団地は、ほとんどが五十一年に入居した。また、西原ハイツでは、百二十戸の建設が計画されており、住宅建設も間近に迫っている。

他方、字内間では、県営内間団地が五十七年度百二十戸、五十七



宮 長吉 太郎
町平 網引（各字で）
主大会 大会・マラソン大会・幼稚園児数二、八八〇人▲中学校生徒数二、〇三五人▲町の一般会計予算総額二、三六億六八七万三千円（昭和五十七年度当初）▲国保特別会計予算二億四、七四四万二千円▲町職員数二、一五七名

▲人口一七、二七三人▲世帯数二、四〇一▲総面積二、五〇四平方キロメートル▲人口密度二、二二人（一平方キロメートル当り）▲耕地総面積二、三六二・九三ヘクタール▲町長・宮平吉太郎▲助役・平安恒政▲収入役・翁長正昌▲教育委員会委員長・仲宗根英輝▲教育長・小川正元▲町議会議員・親泊輝武▲農業委員会委員長・与儀栄▲農協長・城間光雄▲郵便局長▲砂川隆▲体育協会会長・平安恒政▲町老人クラブ連合会長・呉屋幸夫▲町婦人会長・大城静子▲町青年団体連絡協議会会長・新垣良文▲商工会長・小橋川英吉

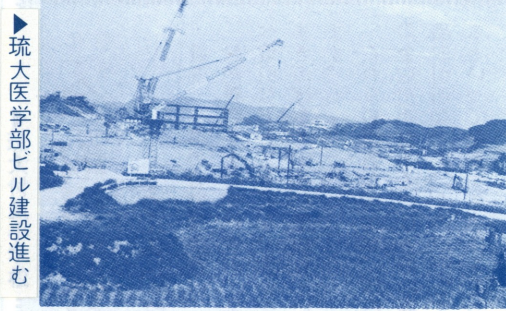
琉大、千原キャンパスへ移転

琉球大学の本土復帰に伴う国立移管によって国立一期並みの規模にするため千原、上原地域に四十四万坪（一四五万二千平方メートル）の用地買収が昭和四十七年に行われた。

その建設も昭和五十年から農学部付属農場敷地造成を皮切りに着



▲現在建設が進められている県営内間団地



▲琉大医学部ビル建設進む



▲琉大付属小学校

開発と

環境保全

本町は、過去十年間に、地域開発が進んだ。それに伴って大気汚染、水質汚濁、騒音、悪臭等の公害問題が起

西原町地形図



々と進み、五十二年に同農場移転をはじめに琉大のキャンパス移転は、今年三月、教育学部が移転を完了したため、教育研究施設、管理施設のすべてが首里キャンパスから新キャンパスの本町千原地区キャンパスに移転した。

琉大附属小学校も完成し、今年四月から一年生と四年生の児童をそれぞれ百二十名受け入れ、三ヶ年間で全学年の定員を満たす計画である。

今後このような開発は行政的に指導、抑制し自然環境の保全に努めなければならない時期にさしかかっていると云える。また、緑地開発は住みよい街づくりに欠かせないものであり、高木、雑木等の材採を伴う原野の開発には良好な地域環境を確保するため、規制を加えるべきであろう。

婦人スポーツデー賑わう

町婦人会(大城静子会長)では、日頃スポーツに親しむ機会の少ない婦人の方々のためにスポーツを通して健康増進を図ろうと一五月

十六日午前九時から西原中学校グラウンドで昭和五十七年度婦人スポーツデーを開いた。

親子目かくし競走、パン食競走など。また、飛入りで各婦人会対抗リレー(二チーム四名)を催したところ各婦人会を代表しての競技であるだけに婦人たちはハッキリと負けじと一生懸命走っているようであり、応援団も意気盛んであった。

夜中に聞こえる音というのは意外に気になるものです。ある団地でこんな話がありました。――夜中に目を覚ますと窓越しにモーターのうなり音が聞こえてくる。翌日原因を調べてみると、一階の人が使っているクーラーの音でした。昼間は気にならない音も、夜になると大きく聞こえる――他人の安眠を妨げる



▲千変万化、ラストランナーの二人三脚、なごやかな雰囲気で行われる。

人会から約八百名が子ども連れで参加しグラウンドいっぱいになり、炎天下休みながら思い思いに競技を楽しんでいるようであった。競技種目は、子どもかけっこ、中年かけっこ、千変万化、ダンス、ふうせんわり、高年かけっこ、借り物競走、若妻かけっこ、

県民総走ろうフェスティバル終わる

復帰十周年と主要五島一周道路の完成を祝う県主催の健康マラソン・県民総走ろうフェスティバル

が五月十六日に開かれ本町でも町三役をはじめ各支部子ども会、老人クラブ、各支部スポーツ少年用、



▲走る前に皆なそろって準備体操頑張るぞ!!

近隣騒音

隣近所への思いやりを

冬の間は窓を閉めることが多いためあまり気にならなかった音も、これから夏に向けて窓を開け放つようになると、隣近所によく聞こえるようになります。しかし、音を完全に「遮断」するのは不可能です。隣近所の人々とトラブルを起こさないために、夜間はテレビやステレオのボリュームを絞ったり、クーラーなどは取り付ける位置をよく考えて、隣近所に迷惑のいかない場所を選びましょう。

また、近所の人たちとは、気軽に「ちょっとうるさいわよ」と言えるような付き合い方を考えたいものです。



健康づくりの食生活カルシウムを蓄えるには

骨や歯をつくるカルシウムは、わたしたちの体に欠くことのできない栄養素です。最近、カルシウムへの関心が高まっていますが、その理由としては、骨折やむし歯が多く発生していることが挙げられます。カルシウムが、特に妊産婦や成長期の子供に必要なのは言うまでもありません。しかし、人の体にカルシウムの必要なことは、大人

「金」取引悪質業者に御用心

うまい話には落とし穴

最近、一部の悪質な業者が、一般消費者を金の先物取引、延べ取引などとまきこみ、大金をまきあげるケースが増加しています。

これらの悪質な業者は、国内の金取引市場あるいは香港の商品取引所などで、金の取引をするといって勧誘する手口をとっています。

これらの悪質業者は、電話やダイレクトメールなどでしつこく金などの取引を勧めた上で、セールスマンが訪問して言葉巧みに誘い込み、お客がおかしなと気付いて解約しようとしても言を左右にしたり、脅迫・暴力

も子供も変わりありません。まして高齢化が進んでいる現在、老年期の健康を守るためにも、若いうちからカルシウムを十分摂取するように心がけたいものです。

カルシウムには骨や歯をつくるほかに、血液を凝固させたり、神経の興奮を抑える働きがあります。これは血液中に溶けているカルシウムによるものです。このカルシウムが消費されると、ホルモンの働きで骨の中のカルシウム分が補充仕組がなくなります。ですから、骨のカルシウムはいつも十分に蓄えておかねばなりません。

カルシウムをたくさんとり入れるためには、カルシウムに富んだ吸収のよい食品、例えば、牛乳や乳製品などを食べるようにします。また、同時にカルシウムの吸収を助ける良質のタンパク質やビタミンD(レバーなど)をとったり、直射日光を浴びて紫外線に当たるのも、カルシウムの補給に効果があります。

反対に、インスタントラーメン

などの加工食品を食べすぎたり、糖分をとりすぎると体内のカルシウムのバランスが崩れる恐れがありますから、注意しましょう。

パパさん、五区が優勝

バレーボールを通して日頃の運動不足を解消し健康増進に役立てようと一町体協(平安恒政会長)主催の第四回各区対抗バレーボール大会が五月二十三日午前九時から西原小、西原中の両体育館で行われた。

バレーボールが十三チーム、ママさんが十四チーム参加して大会が開かれ各試合熱戦がくりひろげられた。各チームともそろいのユニホーム姿にキビキビしたプレーが見られ賑わった。

熱戦の末、パパさんは五区が六区を2対0で下し六区の四連勝を阻止し優勝、ママさんは、十五区が十六区を2対1で下し三連勝の優勝に輝いた。

このほど、次の方々から寄付がありました。

▲町社会福祉協議会へ
字小波津一六一番地の小波津ヒデ子さんから金十万円。ヒデ子さんは、今まで母子家庭で児童扶養手当をもらっていたが、末娘が今年、十八歳に到達したことから今までの恩返しのため町の福祉に役立てようと今回の寄付を思い立った。

▲町育英会へ
浦添市勢理客二番地の五の沖縄県視聴覚教育映画の会(代表者 川迫兼夫)から金五万円。この紙面をかりて二名の方々のご厚意に感謝申し上げます。

国民年金の保険料は納めましたか。



6月は第1期納期です。忘れずに早めに納めましょう。

宮平光吉氏、町体育指導委員功労で表彰される

今年二月十九日(二十一日)に佐賀県武雄市で開かれた九州地区体育指導委員研究大会の席上で永年体育指導委員としてのご功労を讃えて本町字翁長二四〇番地一三の宮平光吉氏(町体育指導委員)に表彰状が九州地区体育指導委員協議会長から手渡された。

寄付お礼

このほど、次の方々から寄付がありました。

▲町社会福祉協議会へ
字小波津一六一番地の小波津ヒデ子さんから金十万円。ヒデ子さんは、今まで母子家庭で児童扶養手当をもらっていたが、末娘が今年、十八歳に到達したことから今までの恩返しのため町の福祉に役立てようと今回の寄付を思い立った。

▲町育英会へ
浦添市勢理客二番地の五の沖縄県視聴覚教育映画の会(代表者 川迫兼夫)から金五万円。この紙面をかりて二名の方々のご厚意に感謝申し上げます。